

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

学校・学級経営コース  
／久我 直人

### ■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

#### I. 学長の定める重点目標

##### I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

#### 1. 目標・計画

平成23年度より、単独申請した「OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発的研究」という研究課題において、科学研究費の交付をいただいている(平成23, 24, 25, 26年度)。

本学教職大学院における実習を通じたスクールリーダー育成の方法論の開発をすすめ、より高度なスクールリーダー育成プログラムの構築を目指している。

一方、共同研究者として「論拠と実践的有効性の明確な学校組織マネジメント教育プログラムの開発」(代表者:佐古秀一)をすすめている。

これら単独研究、共同研究を着実に進め、次年度も継続して申請し、外部資金の獲得ができるようにする。

#### 2. 点検・評価

①採択いただいた科研費を活用し、「OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発的研究」を、学校との連携を通して順調にすすめることができた(採択期間平成23～26年度)。

共同研究校において、学校組織マネジメントを駆動させる実践研究をすすめるなかで、教務主任等がスクールリーダーとしての資質と能力、具体的な展開技術の修得が確認された。

また、本学教職大学院における実習を通じたスクールリーダー育成の方法論の開発をすすめ、より高度なスクールリーダー育成プログラムの構築をすすめることができた。

②共同研究者として協力している「論拠と実践的有効性の明確な学校組織マネジメント教育プログラムの開発」(代表者:佐古秀一)においても協働的に研究をすすめてきた。

③次年度の新規科研費申請(代表者:村川雅弘)の準備に取り組んだ(採択決定)。

特に、2012年8月の中央教育審議会答申で強調されている「学び続ける教師」を支援し、育成する研修システムの開発的な研究の枠組みを構築した。

## I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

### 1. 目標・計画

静岡県で公開講座を行い、本学教職大学院で行っている学校組織マネジメントの展開にかかる授業や実習の内容を紹介する。  
静岡での公開講座は、学校・学級経営コースとして3年目を迎える。「鳴門教育大学」が静岡でもなじみのある大学として定着するように継続していく。  
また、各県・市教育委員会主催各種研修会での講演で、今日的な教育課題の解決へ取り組む教職大学院の実践事例等を紹介し、本学教職大学院の魅力をアピールする。  
大学内外の大学院説明会に積極的に参加し、スクールリーダーとしての院生の成長、実習をとした学校の改善等、エビデンススペースで本学教職大学院の魅力を紹介し、定員充足に取り組む。

### 2. 点検・評価

①本学大学院説明会(学外;名古屋・東京)へ出かけ、若手の実践力育成やスクールリーダー育成の内実を、事例を用いて紹介し、本学教職大学院の魅力を伝え、定員充足に取り組んだ。  
参加者からも実践的指導力育成にかかる興味と反応を示され、熱心な質問等をいただいた。  
②静岡県教育委員会、静岡県静西教育事務所、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会を訪問し、本学教職大学院のスクールリーダー育成のシステムと実践力育成の内実について、実践事例を持参して説明した。本学教職大学院への理解を深めていただくと共に派遣への協力の言葉をいただいた。  
特に、静岡県教育委員会へは、6月と年度末の3月25日に訪問し、安倍教育長先生に直接、本学教職大学院の成果と効果を伝え、高い評価をいただいた。次年度からの派遣にかかる好意的な反応をいただいた。  
③静岡県で公開講座を行い、本学教職大学院で行っている学校組織マネジメントの展開にかかる授業や実習の内容を紹介し、本学の教職大学院の学校改善に資する魅力を伝えた。  
④各県・市教育委員会主催各種研修会での講演で、今日的な教育課題の解決へ取り組む教職大学院の実践事例等を紹介し、本学教職大学院の魅力をアピールしてきた。  
⑤鈴鹿市との連携事業、徳島市との連携事業、スクールアドバイザー事業等へ積極的に応えるなかで、本学教職大学院の実践事例を組み込むとともに魅力を伝えてきた。  
⑥高知県教育委員会中澤教育長先生から、生徒指導困難校の改善事業(夢いっぱいプロジェクト)への事業支援アドバイザーを直接依頼され、12月より6校への支援に入った。  
その成果を踏まえて、本学教職大学院への派遣とともに派遣院生の指導を教育委員会担当者から依頼された。

## II. 分野別

## Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

### 1. 目標・計画

教職大学院の教育において、理論と実践を融合した授業を展開し、院生の教育実践力育成につながる実践事例を組み込んだ授業を展開する。  
また、授業方法の工夫では、事例を媒介として、現職院生と学卒院生等、キャリアの違う院生相互の協働学習場面を設定し、複眼的な省察が促されるようにし、学びの内実や深まりを促進する。  
学生支援においては、コラボレーションオフィスコーディネーターとして、院生に積極的にかかわり、教職大学院の院生の学修面、生活面、そして実習にかかる悩み等を受け止め、支援を行う。  
また、学生支援委員会委員として、フォーマルな立場からも学生の豊かな学生生活を実現できるように、学生の支援を行う。

### 2. 点検・評価

①教職大学院の教育において、理論と実践を融合した授業を展開し、院生の教育実践力育成につながる実践事例を組み込んだ授業を展開した。また、授業方法の工夫では、事例を媒介として、現職院生と学卒院生等、キャリアの違う院生相互の協働学習場面を設定し、複眼的な省察が促されるようにし、学びの内実や深まりを促進し、授業評価において高い評価（満足度4.6）を得た。  
②学生支援委員会委員として、フォーマルな立場からも学生の豊かな学生生活を実現できるように、学生の支援を行った。  
③教員採用試験に向けた支援活動にも、積極的に参加し、採用試験に向けた指導を行った。  
自身の教育委員会事務局経験を生かして、具体的に指導・支援を行うとともに、採用者側の評価の視点についても説明した。  
④コラボレーションオフィスコーディネーターとして、院生に積極的にかかわり、教職大学院の院生の学修面、生活面、そして実習にかかる支援を行った。  
⑤個々の学生・院生の進路や悩み等の相談への対応  
教育実践への不安等をかかえて研究室を訪れる学生・院生に対して、相談への対応と自立に向けた支援を行った。  
また、科目履修や研究に関する相談に訪れる院生に対し、面談を通して対応するとともに、メールによるケアも行った。  
また、院生の持病等の相談を踏まえ、無理なく、しかも効果的に実践研究を進められるように支援し、安心して学べる環境づくりに腐心してきた。これまで、体調への配慮をしながら無理なく実習が展開できるように置籍校の校長先生と相談し、手厚くサポートすることによって院生の負担軽減と学びの内実の両立を図ってきた。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

平成23年度より、2年目を迎える科学研究費の研究課題である「OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発的研究」を進める。

具体的には、教職大学院における院生の実習や、実践研究協力校での実践を通して、学校の課題を可視化し、教職員の組織化を実現する学校組織改善プログラムを駆動させる。

そこから求められるスクールリーダーとしてのファシリテート機能を抽出し、OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発につなげていく。

4年計画の2年目の研究を着実に進められるように尽力する。

また、学級経営研究にかかる事例研究をさらに進め、学級経営における教師の省察力の内容と構造の解明につなげる。その成果を本にまとめ、著書の発行を実現する。

### 2. 点検・評価

①平成23年度より、2年目を迎える科学研究費の研究課題である「OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発的研究」を進めた。

具体的には、教職大学院における院生の実習(4校)や、実践研究協力校(4校)での実践を通して、学校の課題を可視化し、教職員の組織化を実現する学校組織改善プログラムを駆動させている。

そこから求められるスクールリーダーとしてのファシリテート機能を抽出し、OJT型スクールリーダー育成プログラムの開発をすすめてきた。

②教職大学院でOJT型スクールリーダー育成への取組にかかる実践研究をまとめた2本の論文が、日本教育大学協会論文集『日本教育大学協会研究年報』(第30集)に掲載された(A論文2本)。

③学校組織マネジメントの展開とその効果について、実践研究実施校との連携のなかで明らかにし、研究をまとめた。その研究に関して、日本教育経営学会において発表した。

④学校組織マネジメントにかかる実践研究を「教師の組織的省察に基づく教育改善プログラムの理論と実践」としてまとめた。

「教育実践学論集」第14号への掲載が決定された(A論文)。

⑤教職大学院における実践研究の成果について、学校の変容と院生の学びの視点からまとめた。

そのことについて、教育大学協会研究大会(鹿児島)において発表した。

⑥学級経営にかかる事例研究をすすめ、学級経営における教師の省察力の内容と構造の解明につなげた。

その成果を本にまとめ、著書『優れた教師の省察力』を発行した。

⑦「新規採用教員の育成に関する課題と対応」(教育開発研究所, 2012, pp171-173,『教務主任の仕事術』, 山崎保寿編集)を執筆した。

⑧「学級経営に悩む担任教師への支援」(教育開発研究所, 2013, pp104-107,『教務主任の仕事術2』, 山崎保寿編集)を執筆した。

⑨「自校が取り組むべき教育課題の可視化と共有」(教育開発研究所, 2012, pp187-191,『ワークショップ型校内研修』, 村川雅弘編集)を院生鈴木孝志氏と共著した。

⑩「子どもが“意欲”を持てる学級経営」(教育開発研究所, 2013, pp50-51,『月刊 教職研修』)を執筆した。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

大学の重要な課業の一つとして位置づけられた教員免許更新講習であるが、平成24年度教員免許更新講習実施委員会副委員長の大役を仰せつかった。  
受講者にとってわかりやすく実施できるように工夫し、免許更新講習が滞りなく実施できるように尽力する。  
教職大学院のコラボレーションオフィスコーディネーターとして、授業公開や学修成果発表会等を企画・運営し、各県・市・町教育委員会、並びに各学校との連携を推進していく。  
学生支援委員会委員として、学生の視点からの支援を実現し、学生からの信頼を得る大学運営に尽力する。

### 2. 点検・評価

①平成24年度教員免許更新講習実施委員会副委員長として、免許状更新講習の教員の人員配置、日程の調整、並びに講習内容・試験等にかかるチェック作業等を行い、滞りなくすすめてきた。  
②文部科学省からの依頼を受け、免許状更新講習にかかるシンポジウムの計画案を作成し、基調講演、パネルディスカッションを設定した。  
また、そのパネルディスカッションのコーディネーターを務めた。  
③教職大学院のコラボレーションオフィスコーディネーターとして、授業公開や学修成果発表会等を企画・運営し、各県・市・町教育委員会、並びに各学校との連携を推進してきた。  
また、1年次生のグループ担当として、院生への学びと生活の両面からのメンテナンスを行い、本学の強みである「きめ細かな院生指導」を具現的に実践し、大学運営を下支えしてきた。  
④学生支援委員会委員として、学生の視点からの支援を実施するとともに、学生用危機管理マニュアルの作成にかかわった。  
いじめや不登校等、学校が抱える教育課題解決に積極的に支援に入り、教育委員会、学校現場との連携を深めた。具体的には、以下の4点の取組を実施した。  
⑤本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)への継続的な参加と直接的な学校支援を行った(計11回)。  
⑥本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行った。  
⑦高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして、生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行った(6校)。  
⑧教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行った(計7回)。  
この他、各県・市等からの依頼に応じて、教育改善にかかる支援を行い、本学の社会的認知の向上に努めた。  
また、以下の2点の取組を通して、各県の教育委員会との連携を深め、本学の教育的資源を積極的に広報するとともに互恵的な協働関係の構築をすすめた。  
⑨静岡における公開講座を実施し、33名の参加者を得、参加者からも高い評価を得た。  
⑩静岡県、高知県等、教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進、協働関係の確立をすすめた。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

社会貢献として、下記のような様々な場面を設定し、また、教育委員会等からの依頼に応じ、本学と社会との連携を深められるように尽力する。

- ①本学スクールアドバイザー制度に登録し、教育委員会、学校のニーズに応じて講演・講話を行う。
- ②鳴門教育大学公開講座を静岡で開催し、本学教職大学院における教育効果の一端を静岡へも届ける。
- ③徳島県主催の平成24年度大学・研究機関等研修を、徳島県教育委員会との連携して、昨年度に引き続き実施する。
- ④徳島県平成24年度10年目経験者研修での講演を徳島県教育委員会からの要望に応じて昨年度に引き続き実施する。
- ⑤三重県教育委員会主催の小中学校事務職員主査研修会での講演を、三重県教育委員会からの要望に応じて実施する。
- ⑥淡路市教頭会研修会において、教頭会からの依頼に応じて、年間を通して講師を務める。
- ⑦浜松市教育委員会主催の研修会の招聘講師として、講演を行う。

徳島県立科学技術高等学校の学校評議員として、大学と高校の連携を具現化していく。

### 2. 点検・評価

社会貢献として、下記のような様々な場面を設定し、また、教育委員会等からの依頼に応じ、本学と社会との連携を深められるように尽力してきた。

- ①本学スクールアドバイザー制度に登録し、教育委員会、学校のニーズに応じて講演・講話を行った(計7回)。
  - ②鳴門教育大学公開講座を静岡で開催し、組織マネジメントにかかる講座を行った。33名の参加を得、高評を得ることができた。
  - ③徳島県主催の平成24年度大学・研究機関等研修を、徳島県教育委員会との連携して、実施した。
  - ④徳島県平成24年度10年目経験者研修での講演を徳島県教育委員会からの要望に応じて昨年度に引き続き実施した。
  - ⑤三重県教育委員会主催の小中学校事務職員主査研修会での講演を、三重県教育委員会からの要望に応じて実施した。
  - ⑥浜松市教育委員会主催の組織マネジメント研修会の招聘講師として、講演を行った。
  - ⑦本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)において、国府小学校、南井上小学校、入田小学校からの依頼を受け、校内研修支援を行った(計11回)。
  - ⑧本学教職大学院と鈴鹿市との連携事業において、講話や授業研究における助言等、大木中学校の校内研修支援を行ってきた。
  - ⑨高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして、生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行った(6校)。
  - ⑩徳島県立科学技術高等学校の学校評議員を務め、学校運営と教育活動の両面から評価を行った。
- この他、各県・市等からの依頼に応じて、教育改善にかかる支援を行い、本学の社会的認知の向上に努めた。各県、市の教育委員会、学校等との連携を深め、本学の教育的資源を積極的に広報するとともに互恵的な協働関係の構築をすすめた。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- ①研究においては、科研費の単独採択(久我23年度～26年度)と共同研究者としての採択(代表者;佐古秀一)の両方の外部資金を活用し、充実した研究をすすめてきた。その研究成果の一部を、日本教育経営学会、教育大学協会研究大会で発表し、一定の評価を得た。また、共同研究者として応募していた研究(代表者;村川雅弘)の25年度採択が決定した。また、これまでの実践研究をまとめた3本がA論文として掲載された(日本教育大学協会論文集『日本教育大学協会研究年報』(第30集(A論文)に2本)、『教育実践学論集』(第14号(A論文)))。さらに、研究の成果を著書にまとめた。
- ②社会貢献として本学教職大学院と鈴鹿市、徳島市との連携事業を通して、各校のニーズに応じて校内研修支援を行った(鈴鹿市2回、徳島市計11回)。さらに、本学の教育支援・アドバイザー事業において、依頼を受け講演等を行った(計7回)。また、いじめや不登校対応として、高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして、生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行った(6校)。
- ③定員充足のために、静岡県教育委員会、静岡県静岡西教育事務所、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会を訪問し、本学教職大学院のスクールリーダー育成のシステムと実践力育成の内実について、実践事例を持参して説明した。本学教職大学院への理解を深めていただくと共に派遣への協力の言葉をいただいた。特に、静岡県教育委員会へは、6月と年度末の3月25日に訪問し、安倍教育長先生に直接、本学教職大学院の成果と効果を伝え、高い評価をいただいた。次年度からの派遣にかかる好意的な反応をいただいた。また、高知県教育委員会中澤教育長先生から、生徒指導困難校の改善事業(夢いっぱいプロジェクト)への事業支援アドバイザーを直接依頼され、12月より6校へ支援に入った。その成果を踏まえて、本学教職大学院への派遣とともに派遣院生の指導を教育委員会担当者から依頼された。また、公開講座を昨年に続き、静岡で行い、本学教職大学院の実践研究等を紹介し、本学の教育実践に資する魅力を伝えた(33名の参加者を得た)。
- ④本学大学運営においても、免許状更新講習実施委員会副委員長並びに学生支援委員会委員として、尽力した。特に、免許状更新講習実施委員会として、文部科学省からの依頼に応じてシンポジウムを開催し、パネルディスカッションのコーディネーターを務めた。